

「関係ない」は怖いこと

国立大学法人山梨大学教育学部附属中学校三年 大野 ひなた

この夏、祖父の三回忌があった。祖父がお世話になった人たちが集まり、祖父を愛した人たちと生前の話で花が咲いた。祖父は十二年の闘病生活を経て、天国へ行った。長い間C型肝炎を患い、月に一度程度通院していた。病気が発覚してからはお酒もたばこも一切口にせず、何種類もの薬を毎日忘れずに飲み、家族のため、そして自分のために一日でも長く生きようとしていた。

祖父は闘病中も私や私の姉・いとこに会いに来てくれていた。道すがら何軒もの店に立ち寄り、たくさんのお土産を持って私の家を訪れてくれた。祖父が私たちに会いに来ることで、母が祖父の分の食事の心配をしなくていいように、テイクアウト料理まで買ってきた。我が家での祖父との会話や食事風景を思い出す。

「じじの病気がうつらないように、食べたいものがあったら先に取り分ける。」と祖父は言っていた。母も何度も聞いているうちに、祖父の料理だけ、自然と大皿から盛り分けるようになっていた。母は、

「使ったお皿は違うスポンジで洗うように。」

とも言い聞かされていたようだ。長い月日この話を聞いたことで、C型肝炎はうつる病気だ、と家族全員が思っていた。祖父は自分がC型肝炎になったことで差別されるのをひどく嫌がり、人に拒絶されることを恐れた。自ら周りへの病気の感染を防ぐ方法を伝え、自分が怖がっていることを回避した。人が好きで、人との付き合いを大切にしてきた祖父らしい生き様だと思った。

祖父が亡くなり、担当医から

「C型肝炎は日常生活ではうつらない病気だ。」

と聞いた。輸血などの血液を介して人から人へうつる病気だそうだ。祖父は若い時に手術をし、そのときの輸血が感染のもとではないか、という話だった。驚いた。私たち家族の肝炎に対する理解は完全に間違っていた。身近な祖父の病気ですらも誤解してしまっていた。それは肝炎患者に偏見を持ち、差別をしていたのと全く同じだと思い自分を恥じた。

このような誤解や偏見は、私だけのことではなく一般的なようだ。国立感染症研究所の肝炎患者に対する差別や偏見の実態調査によると、“患者に対する不当な差別が存在し、それに伴って患者の精神的な負担が生じている”だそうだ。

患者だった祖父本人も肝炎に対する間違った知識を持ち、患者である自分も含め、その病気の患者に偏見を持っていた。過去には肝炎患者以外にも病気への正しい理解がなく、偏見や差別が存在したという歴史がある。H I V感染者やエイズ・ハンセン病などの患者も、間違った知識や理解不足により患者本人にとどまらず、家族まで差別されることがあるようだ。この春まで大流行していた新型コロナウイルスにおいても同じことが言える。予防法や治療法が分からず、多くの人が未知のウイルスを恐れたことで、感染者はもちろん医療関係者まで、いじめや差別の対象になった。コロナに感染した友は十日程度学校を休み、その間学校に行っていた私たちはその欠席理由を、はっきりと聞かせてもらえなかった。まるで口にしてはいけない病気のようなようだった。私も実際、感染は怖かった。感染者数は毎日報道され、増減する感染者に一喜一憂し、感染者が多い県のナンバーの車に嫌悪感を覚えた。今でも“北杜市在住です”と書かれたマグネットが貼られた車をたびたび見かける。一部で県外ナンバー車に嫌がらせ行為が起きている、ということで、市は北杜市在住であることを示す表示カードを作成し、希望者に配布した。誰だって差別や偏見が怖い。そんなものを受けずに生活したい。病気への差別や偏見をなくしたい、と声をあげることは簡単である。しかし、病気に対してひとりひとりが正しい知識を持ち、正しい理解をしないと、これまでと同じようなことを繰り返してしまいそうだ。

祖父を亡くした今、私は、間違った知識や誤解による差別、偏見を絶対にしないということを心に決めている。自分がそうしたつもりがなくても、小さな誤解が偏見となり、それが差別につながる。悪気がなくても、人を傷つけてしまうことがある。大切な人を拒否して、失ってしまうことさえある。私は、そういった間違いを絶対に犯したくない。自分とは程遠い出来事を自分ごととして捉えず、知ろうとしないのはやめにしよう。世界のひとりひとりが自分と違ったことや一見関係のなさそうなことを知ろうとし、正しい理解をしよう。それこそが、社会の偏見や差別を減らすことにつながると私は思う。こんなにも情報にあふれ、便利な世の中であるのにも関わらず、まだまだ差別や偏見は消えない。私はその現状がとても悲しく、辛い。誰しものが社会におびえず、楽しく生きられる世の中を、そして社会全体がひとりひとりの声に耳を傾けられる世界を創れるよう、まずは小さな行動から、心構えから、見つめ直したいと思う。